

昭和戦前期の甲府製糸業の構造と特質

—座談会「甲府における繭糸業の歩み」より—

齋 藤 康 彦

はじめに

明治と昭和期を通じて、山梨県は岐阜、長野、埼玉、群馬などの東山養蚕諸県と同様に養蚕・製糸業が著しく展開・発展した県であり、甲府は明治初年以來県内における製糸業の中心地の一つでもあった。また、日本の産業史にとっても大きな意味を持つ明治一九年（一八八六）の雨宮製糸場の女工ストライキの存在も忘れることはできない。これらのことから甲府市史近・現代専門部会も近代における甲府市の産業経済の移り変わりを跡付けていくうえで製糸業は重要な柱の一つを構成すると考えている。だが、山梨県の製糸業の展開過程について検討を行なった先行研究の多くは、主として明治期の製糸業を対象とするものであって昭和戦前期の動向にまで検討を加えたものは意外に少ない^③。しかし、昭和戦前期段階における甲府市の製糸業のもつ諸特質は、これまでなされた明治期の検討によって析出された諸特質の単なる延長とは考えられず、また、先行研究が採用している器械製糸と座繰製糸の「類型」^④、あるいは中小零細

工場と大規模工場との対抗関係の存在の指摘だけでは十分に把握できない側面を持っているなど、さらに解明すべき課題は数多く存在する。

本稿は、それらの課題を考えていく手掛かりを得る目的で、甲府市史編さん委員会近・現代専門部会が、一九八七年七月一八日に実施した座談会「甲府における繭糸業の歩み」の多岐に亘る内容を、昭和戦前期の甲府市の製糸業の持つ構造およびその特質の一端を明らかにすることをテーマに筆者の責任でとりまとめたものである。従って、発言は忠実に再現したが、前後の省略、発言順序の変更など若干の再構成を行なっている点は予め断わっておきたい。

（昭和初年）当時は四〇〇名の芸者衆がいました若松町には、今のように観光とか騒がない時代はどうしてそれだけの芸者衆が流れたかという点、それはもう製糸屋さんと建設業者、県庁とか市役所、銀行は別にして、とにかく製糸屋さんと建設業者で花柳界はもっていました。浜糸（相場）が上がると製糸屋さんはもう全

部芸者衆を揚げてくれました！佐渡町の丸三商会は飲みながら商談、昼から呼ばれました。宵越しの金は持たない気風、遊びはきれいで製糸屋にはあかぬけた粋人が多かった。矢島栄助さん、三日町の細田さん、若尾義角さん：（中塚美佐子氏談）

あれでしようね美佐子さん、昔の製糸屋のお旦那は、お旦那らしかったね。宴会の際芸者さんが来るなんて時は、縫い紋の紋付だからね。夕飯食べに行くときは紋付ですよ。洋服で飯食いに行ったら笑われたね。（三井金三氏談）

製糸屋でなければ人でなかった。若松町あたりでは：（中沢保男氏談）

座談会の出席者達は「全盛」であった頃の製糸業者の羽振りの良さをこのように表現している。

製糸業が昭和戦前期の甲府市の産業経済を支える重要な柱の一つであったことは改めて言う必要はない。事実、例えば、大正一四年（一九二五）の甲府市の産業部門別生産価額構成によれば、全生産額の九七・二パーセントを占める工業部門生産額の実に八六・四パーセントは生糸である。言換えれば、甲府市における全産業の生産額の八割以上は生糸が占めているということになる。しかもこの産業部門別生産価額構成表では捉えることのできない商業部門も、例えば、繭市場、生糸問屋など製糸業と深く関連する業種が多く存在したと考えられ、甲府市の産業経済に占める製糸業の比重はさらに高く、前掲の発言が少しも誇張でないといつてよい。

勿論、甲府市の製糸業も決して一本調子で発展を遂げてきたものではないことは言うまでもない。製糸業は一般に「生死業」とも別称されるようにその内部では激しい浮き沈みが繰り返えされていた

のである。

大正一―一三年の数値が欠けているために必ずしも正確なものではないが、大正期以降の甲府市の製糸業の推移の動向を示した第一表によれば工場数、製造高、販売価額のどの指標をとっても大きく増減の波を打っていることを看取できる。特に座繰糸の場合の増減の中が目を引き。即ち、明治末年に襲った不況の影響と考えられるが、大正初年には僅かの四九戸を数えるのみで、しかも年を追って減少すらしていた座繰製糸の製造戸数が、第一次世界大戦を契機とする「生糸ブーム」を背景として大正六年には一挙に一〇二一戸へ僅か二年で四〇倍に急増した。その後、昭和初年までの一〇年間には製造戸数はほぼ一〇〇〇戸水準で推移するが、昭和五年の所謂、昭和恐慌で再び減り始め七〇八年で最盛期の半分近くにまで減少してしまう急増減を繰り返す。これに対して器械糸工場は座繰糸に見られるような工場数の急激な増減は見られないが、やはり昭和五年を境に減少傾向をたどっていくことを見ることができ。さらに製造高、販売価額の推移をも見ておきたい。器械製糸の製造高は年によって増減はあるが、大正期を通じては三〇四万貫台で推移したが、大正末年に至り一挙に倍増し、不況が始まった昭和五年以降生産量は急増を続け、僅か数年でさらに倍増し昭和九年の生産量は二〇万貫台に達し工場数の推移とかなり異なった動きを示している。しかし、販売価額は基本的に糸価の乱高下に因るが、昭和四年の一〇二〇万円をピーク、同九年の六二四万円をボトムとする大きな変動を見せ、必ずしも生糸の生産量と連動した形で増加していない。販売価額で昭和四年の水準を超えるのはやっと昭和一四年になってからである。このように不況期以後に見られる生糸生産量の急増現

(第1表) 甲府市製糸業の推移

	器 械 糸			座 繰 糸			玉 糸			屑 糸	
	戸 数	製造高 千貫	価 額 万円	戸 数	製造高 千貫	価 額 万円	戸 数	製造高 千貫	価 額 万円	製造高 千貫	価 額 万円
大正	1	13	39.5	222.2	49	16.4	71.5	1	0.9	3.0	
	2	13	37.9	223.6	31	13.2	58.6	1	0.9	2.9	
	3	13	44.0	207.3	26	1.9	7.5	1	0.9	2.8	
	4	13	27.0	141.7	26	14.0	61.6	1	0.9	4.0	11.4
	5	14	31.8	235.5	126	19.8	111.8	1	1.0	4.4	21.8
	6	17	43.8	382.8	1,021	22.8	159.6	1	1.0	5.5	25.9
	7	17	45.2	451.7	1,021	23.5	176.3	1	1.1	5.9	31.9
	8	18	49.6	824.7	1,029	25.9	354.1	2	1.2	16.2	28.0
	9	20	39.7	675.8	1,029	20.7	279.2	2	1.3	16.8	32.1
	10	18	45.8	453.3	1,033	23.0	172.5	2	1.1	25.7	25.7
	14	61	94.8	1,151.6	1,048	27.4	301.0	1	2.3	9.4	21.3
	昭和1	61	93.8	955.3	1,045	16.4	147.3	1	2.3	26.2	49.8
	2	61	97.2	770.3	1,041	20.7	134.6	1	2.3	21.5	49.8
	3	76	121.6	965.3	1,045	20.9	135.6	1	2.6	15.7	31.3
昭和	4	97	164.5	1,240.3	960	13.5	79.5	1	3.3	17.4	38.8
	5	96	202.1	822.8	827	8.7	27.1	1	3.6	13.2	49.8
	6	95	185.8	638.1	760	10.2	25.6	1	3.0	10.8	48.0
	7	85	196.1	936.8	747	6.8	19.3	1	3.0	7.1	80.2
	8	82	186.9	711.8	620	6.2	16.6	1	2.7	7.4	76.2
	9	80	209.9	624.0	580	11.8	26.2	1	2.7	6.5	68.3
	10	79	226.6	1,062.5	576	16.6	74.5	1	3.1	6.1	94.5
	11	79	288.5	1,196.3	* 37	8.8	31.6	1	3.8	8.6	141.8
	12	70	223.3	1,000.3	668	10.6	36.9	1	2.7	10.0	172.3
	13	63	231.7	975.2	450	15.6	57.5	1	3.2	7.9	94.6
	14	62	218.5	1,574.7	568	15.3	113.1	1	3.3	10.7	163.0
										21.0	123.3
											257.1

屑糸の製造高、価額は昭和10年以前は生皮屑のみ、同年以降は生皮屑、屑糸、鬚斗糸の合計額である。

* = 10 釜 未 満 不 明

『山梨県統計書』より作成

象は製糸業者が糸価の暴落に因る収入の減少を生産量を増やすことでカバーしようとして一層の増産を行なったためであろうと考えられる。座繰製糸は製造高、販売価額共にその規模は器械製糸のそれを下回るが、大正期を通じて器械製糸との割合はほぼ二対一の水準を維持しその存在は無視、ないし軽視することはできない。この座繰製糸の特徴として製造戸数が急増した大正五年以降、一戸当りの製造高はそれまでの四〇〇〜五〇〇貫から僅かの二〇貫へと激減する事実があり、このことは急増した座繰製糸製造戸数の多くは極零細規模であったことを物語っている。煩雑さを軽減するため具体的な図表は略すが、器械糸と座繰糸の釜数が判明する昭和五年以降の数値によれば、器械糸の場合の一工場当りの釜数六〇〜七七釜に対して座繰糸のそれは僅か一〜一・四釜であって両者には画然とした差が存在する。言換えれば、座繰製糸は一戸に一台の座繰製糸機を備え生産に従事していたと考えられる。この点は、

（甲府では）出釜と言つて、市内の比較的下層、そう言つてはなんですが、生活が余り潤沢でない家のおかみさん達が家へ機械を据え付けましてね、足踏みの機械ですね、その出釜のおんなしが相当の数になる。横糸を引いていましたね。（三井金三氏談）

という出席者の発言からも裏付けられる。座繰製糸は戦前段階の甲府の下層市民にとって重要な現金収入源としての意味を持っていたのである。甲府市の市民総出で製糸業を支えていたと言つて過言でない。家庭婦人の「家内副業」としての座繰製糸の存在、それ故に製糸業の好況期にはそれこそ雨後の筍の如く簇生し、不況期には潮の引くように急激に減少してしまうのである。ただ、県全体で見ると昭和初期以降ははっきりと減少傾向を示すが、郡部地域における

座繰製糸製造戸数は大正期を通じてほぼ一万戸規模で推移し甲府市の場合のように急激な増減は見られないのである。それはともかく、甲府市の製糸業においては「出釜」と呼ばれていた座繰製糸がかなりのウェイトを占めていた事実を改めて確認しておきたい。だが、前にも述べたが甲府市の製糸業のもつ特徴はこの工場形態による器械糸と「家内副業」としての座繰糸という「類型」区分だけでは捉えられない側面を有していたのである。「国用生糸」の存在がこれである。

甲府は特殊な甲斐絹の原料の横糸というものを引いておりましたから、取引はほとんど初狩から大月、それから谷村から南都留に行つておりました。チャミシヤの原料になっている。週二回市があった。郡内から客が来てみんな買った。国用の糸が多く、ほとんど輸出の糸より多かつたんじゃないかと思ひます。北陸、丹後へ行つた。（三井金三氏談）

第二表は農林省蚕糸局の『全国製糸工場調査』から作成したものであるが、昭和初年段階の山梨県における郡市別の生産生糸を輸出用と地遣用の「販路」によつて区分した構成表である。同表で言う輸出用と地遣用との違いは基本的には生糸織度によつて表現される生糸の種類であり、輸出用生糸は一四デニール、地遣用は二一デニールと輸出用のそれより太い生糸であり、原料としての用途が異なっていたのである。第二表からは次の諸点を読み取ることができる。

① 昭和二年の場合、山梨県全体で生産した生糸三八・六万貫のうち八二・八パーセントは輸出用生糸であつて山梨県全体で見るとほぼ圧倒的に輸出用生糸の生産量が多い。

② しかし、甲府市にかぎつて言えば輸出用生糸と「国用製糸」

(第2表) 郡市別輸出・地遣製糸生産量

(単位 千貫)

	昭和2年			昭和5年		
	輸出用	地遣用	合計	輸出用	地遣用	合計
甲府市	65.8	40.3	106.1	61.8	52.7	114.4
東山梨	63.0	4.9	67.9	72.2	6.6	78.8
西山梨	1.9	1.8	3.7	2.4	6.4	8.8
東八代	23.8	3.1	27.0	17.1	10.0	27.1
西八代	22.5	1.9	24.5	20.6	2.1	22.7
南巨摩	32.1	3.1	35.2	35.0	1.3	36.3
中巨摩	94.3	7.4	101.7	82.1	22.0	104.1
北巨摩	16.2	1.9	18.1	18.2	7.4	25.6
南都留		1.3	1.3			
北都留		0.7	0.7			
合計	319.8	66.5	386.3	309.4	108.4	417.8

農林省蚕糸局『全国製糸工場調査』（第11、第12次）より作成

とも言われ主に山梨県の郡内地域で広く織られていた「甲斐絹」の原料となった地遣用生糸の割合は六対四であって、他の諸郡に比べると地遣用生糸の比重が著しく高く、山梨県の地遣用生糸量の六〇・六パーセントは甲府市で生産されていたのである。

③ 甲府市と同様に地遣用生糸の比率が高いのは甲府市に隣接する西山梨郡と、その生産量では県全体の三パーセントと著しく少ないが「甲斐絹」の生産地帯として知られる南北都留郡であり、郡内地方では地遣用生糸のみが生産されていた。

これらのことから甲府市における製糸業の特質の一つとして地遣用生糸生産の存在が無視できない点を確認できるだろう。しかも、昭和の金解禁、これが打撃となった。輸出製糸業者がみなつぶれた（原忠三氏談）

びたつと止まった輸出が、一番打撃を受けたのが最高の生糸を作っていた工場で、アメリカはナイロンを作っちゃった。アメリカが買わんものだから内地のものを作らなくてはならない。（中沢理吉氏談）

と言われるように、当時、日本の輸出生糸の八五パーセントを輸入していたアメリカ合衆国での一九二九年一〇月以来の恐慌の深刻化によって同国向け輸出が伸びないこともあって、地遣用生糸生産の比重は一層増大する傾向にあったのである。

輸出を専門にやっている製糸家、昭和の初め頃でも（甲府では）何軒もない、比較的大きな製糸屋。その下に北陸向けの国内品をやる製糸屋。さらにその下にもう一つ横糸屋と言って、出釜と言って横糸を引く製糸屋、繭と枠を渡して各自が持つて行って家で糸にして、また夕方持つてくる。おおまかに（甲府の製糸業の内部

(第3表) 製糸工場の設立時期一覧

(昭和5年段階)

	30釜未満	30釜以上	50 "	70 "	100 "	150 "	200 "	300釜以上
明治20年以前					①		① (1)	
20年以後								
25 "								
30 "		1						
35 "				①	(2)			
40 "								(1)
大正1 "	1				(1)			
6 "	1	(3) 5	(2) 2	1	② 2	(1)		(1)
11 "	5	(2) 5	(1) 4			(1)		
昭和1 "	12	5	(1) 1	4	(1)			
合 計	輸出のみ			1	3		1	
	輸出地遣	5	4		4	2	1	2
	地遣のみ	19	16	7	5	2		

○印は輸出糸、()印は輸出と地遣糸、無印は地遣糸のみを生産していることを示す。
『全国製糸工場調査(第12次)』より作成

は) 三段階に分かれていた。(原忠三氏談)

既に器械製糸と座繰製糸という生産形態による「類型」の存在は指摘したが、一般に工場形態によって生産されている器械糸の内部も、工場規模ばかりでなく、明確な「類型」が存在していたのである。以下、器械糸製造工場の内部における構造的な特色について検討を加えたい。

第三表は前掲の『全国製糸工場調査』から作成した昭和五年段階の甲府市の製糸工場の規模と設立時期の相関表であり、ここではさらに輸出入と地遣用の製造生糸の種類によっても工場を区分して示してある。同調査は釜数一〇釜以上の製糸「工場」を調査対象とするものであって「出釜」と呼ばれた座繰糸は含まれておらず甲府の製糸業の全体像を示していない点は注意を促しておきたいが、同表からは次の諸点を読み取ることができる。

① 個々の工場は、度々の休止、廃業を繰り返したと考えられるが、所謂「生糸ブーム」の起きた大正六年以前に設立されていた工場は僅かの一〇工場を数えるのみであり、ここからも製糸業界の浮き沈みの激しさを看取することができる。

② 生産する生糸の種類によって甲府市における製糸工場七二工場を区分すると、輸出糸のみの生産工場五工場、地遣糸のみの生産工場四九工場、両方の生産工場一八工場であって、工場数から見ても地遣糸生産工場が圧倒的な比重を占めている。

③ 各々に区分された工場の特徴は輸出生産工場の場合は矢島製糸第二工場の八二釜が最も規模が小さく一般的に規模の大きい工場が多く、設立の時期も明治期であるものが多い。この対極が地遣糸生産工場であり、明治三〇年に設立された善積製糸場を例外とし

て、多くは「生糸ブーム」が起きた大正六年以降に設立され、所有釜も五〇釜未満が七割を占め比較的小規模工場が多い。この中間に輸出糸と地遣糸の両方を生産する工場が位置する。

以上の点から昭和前期における甲府市の製糸業の特徴は、器械製糸と座繰製糸という「類型」だけでなく、器械製糸工場の内部にも矢島製糸を頂点とする輸出糸専門工場と地遣糸専門工場との「類型」の存在を析出できるだろう。

一年間のスケジュール的に言いますとね、六月二日が市場の取引の始まる最初の日（春繭は）六月一二日から二五日までなんです、だいたい二週間。それから乾燥して工場が始まるのが一五日から二〇日頃、それが製糸屋の年度始め。それからずっと今度は八月に夏秋蚕、そして晩秋蚕それが九月のお彼岸さんの頃ですよ。（繭が出回るのが）三回なのですよ、昔は。一月二八、二十九日に終り。そして今度は翌年、県のボイラーの検査がある。その検査が終わるまではボイラーは焚けない。はやいところで一〇日、おそいところで一七、一八日まで正月の休み。よく働いたもんです。それから六月五日から休みに入るのは、それが年間のスケジュールです。六月が年度替りです。（原忠三氏談）

当時の製糸業の年間の生産暦は凡そ原忠三氏の語る通りであったろうと思われるが、これまでの検討によって明らかになった器械製糸工場の内部の矢島製糸を頂点とする輸出糸専門工場と地遣糸専門工場との「類型」あるいは工場の規模の大小などによって原料、労働力の確保、さらには販路が各々異なり、それ故に原料繭、糸価あるいは景気の変動によって受ける影響に大きな差が存在したと考えられる。その点については原料繭の購入、労働力の確保の面から出

席者によって次のように語られている。因に、昭和初年段階では原料繭の購入は大正一二年に甲府佐渡町に設立された丸三甲府繭糸商会で行なわれていたのである。

問屋は春日町の若尾、三日町の細田、新田、広瀬があった、丸三商会に行つて繭を買い、夕方になるとごはんを食べながら商いをする。（三井金三氏談）

わたしらの子供の時は郡是、鐘紡との取引が多く、一日一台くらいの列車が甲府に向つて走つておつた。養蚕家が市場へ繭を運んで来た。天秤棒へ両方ぶら下げてきたとか、荷車で引いてきたとか、少しハイカラなやつはリアカー。佐渡町へはリアカーがいっぱい。そこで皿伏せをしながら取引をした。（中沢保男氏談）

（繭は）養蚕家が持つてくるわけですね。市場はこうなつてました。それをベルトコンベヤーに流しますね真ん中に。そうしますと、お皿、おわんですねそこに値段を書いて投げる。それを見てその最高の人に落すということで市場があつた。（中村英雄氏談）昔はね、繭問屋さんへ県外から繭が委託で入つてきた。昔の生糸問屋は今の銀行と同じでございまして、その繭を、問屋さんへ入つたものを買う。金が無いから問屋さんへ預けておく、それから糸を持つていつて繭を持つてきて引く。昔の問屋は金融もやつた。繭は県内のものもありますが、ほとんど県外から入つて来た総量は多かった。奥州から九州、しまいには朝鮮からも入つて来た。問屋を通して買つていた。輸出屋は違いますよ。小田切さんたちはお金があるからそういうことはなく自分で買う。（三井金三氏談）

私のところは荷為替を付けないですよ、小田切は。あのころ繭

の買入れは楽でした。俺に買わせろ、何千貫買うから買わせろと言えば、みんな手を引いて皿を投げれば私の要求する数量が揃った。(小田切彰氏)

ま、なんにしても製糸屋は大変な商売でしたね。そして奥さんの忙しい商売。おやじは相場を相手にやっている。おかみさんが早くから、夜は人が寝てしまうまで苦勞する、とにかく大変でしたね。(原忠三氏談)

夕食ぐらいいしか顔を合わせないほどの忙しさだった。(中沢保男氏談)

女工さんも輸出、国用、座繰に分かれていた。輸出製糸は専門の募集員が、学校を卒業する時に学校出を募集した。それ以外にもその人たちは繭の代買いも行った。主人に代って養蚕家に行って繭の買入れ付けをした。国用製糸の場合には近所の、娘さんも来るけど、だいたいもう結婚したおかみさん連中を集めるわけ。三分の一が通い。私のところなんか三分の一が寄宿。あとはみなおかみさん。県内が多かった。(原忠三氏談)

私のところは郡内が多かった。河口湖付近が多くて、大石、長浜、小立出身者が多かった。暮に各戸に行き契約書を作り、契約手金を打った。先金をやっておいて一年契約で、戦前で五円から一〇円くらい。(賃金は)毎月渡さず、暮れに帰る時に持っていく。当時は御坂峠が通れませんでしたから大月から汽車で送りその時まとまった金を渡す、そして来年の契約する。一〇〇円女工がいた。就業時間は長かった。一日一二―一四時間。午前五時から午後七時まで働いた。通いの人は提灯を持って送って行った。(中村英雄氏談)

おかみさんたちは通勤可能のところですから、それでも二キロ歩いてくる人もいました。見番が、かなり年配の人がいるんですが、それが歩いて人を集めてくる(製糸屋の)おかみさんが、あそこは困っているから漬物でも持たせる、お菓子でも子供に持たしてやるとか色々面倒を見なければ人が集まらなかったのが生糸屋ではなかったのではないかと。(賃金の支払いは)出来高制であり、女工の格付けは手質によって左右された。目方が少なく繭から少ししか糸にできない人はいくらやっても駄目、手質でした。節ってね、糸はスーとなっていなければ駄目でしょう。輸出ではただ、ただみたいな(質の悪い)糸を作って働いては困る、セーブレン検査があった。(原忠三氏談)

甲府に多く存在した比較的規模の小さい器械製糸工場の多くは統計上は「工場」とはなっていたが、基本的には工場主の一家総掛かりの労働によってその経営が辛うじて維持されていた「家業」の水準に留まっていたと考えてよいだろう。従って規模の小さい器械製糸工場は金融面では特に脆弱性を内蔵し、問屋に従属していたのである。

(細田商店のような)問屋は貸付業務の代行をしておった。銀行から金を借りてきて自分の傘下の製糸、仲買の連中に金を貸して、その収益が上がれば返済して行く、各製糸(屋)が糸を専門に引いて、それを細田では富士組が共同再繰といって多くの糸を同じ銘柄の糸に格付けて、糸を一〇俵とか二〇俵とか、まとめて売った分業になっており、当時は。(中沢保男氏談)

製糸屋は問屋に通い帳を出して、それへ繭代がいくらいくら、糸代金がいくらくらと書いて、年末になると利息を付けて金融機

—お招きした方々—

左上より

中沢 理吉氏

中沢 保男氏

三井 金三氏

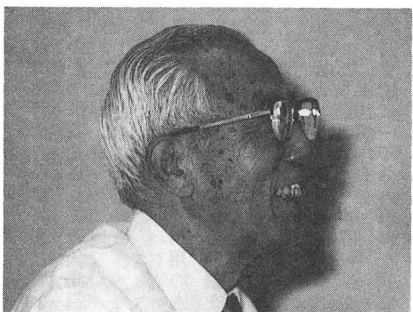
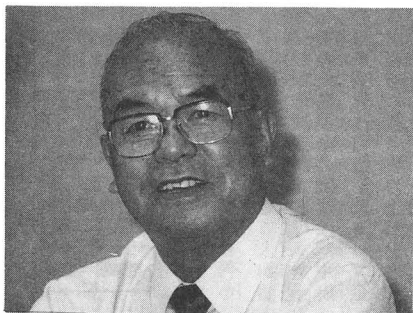
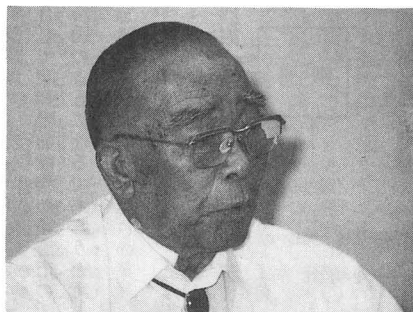
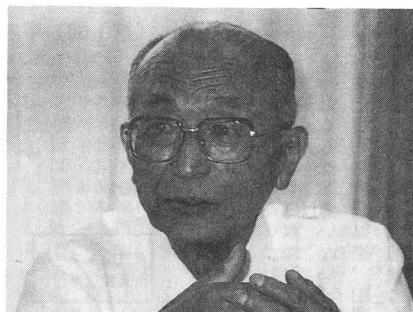
右上より

中村 英雄氏

小田切 彰氏

原 忠三氏

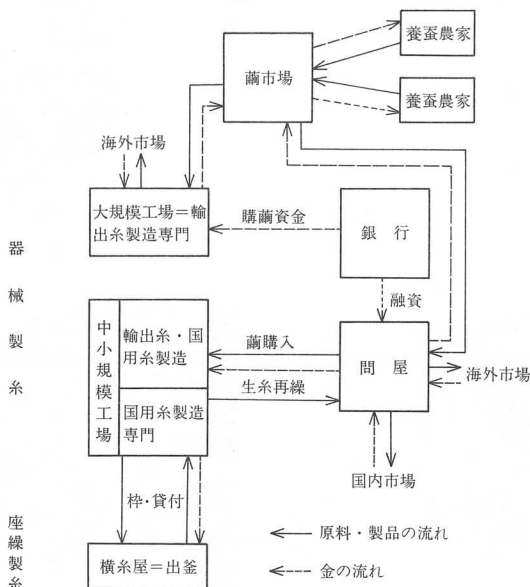
中塚美佐子氏



関と同じようにしていた。(中村英雄氏談)

これまでの座談会出席者の話を総合して昭和戦前段階の甲府市の製糸業の構造を図示すればおよそ第一図のようになるであろうと考えられる。

(第1図) 甲府の製糸業の構造



甲府市のみならず日本における製糸業の一つの「転機」は昭和恐慌にあったことは間違いない。昭和七年の矢島製糸の倒産は、甲府市ばかりでなく明治期以来、山梨県の製糸業界に君臨したトップ企業の倒産であり、昭和戦前期における甲府市の製糸業の趨勢を占う

上で象徴的な出来事であった。「大矢島」と称され、明治四二年段階では片倉組、岡谷製糸、小口組など信州諏訪地方の製糸家と肩を並べ日本全体で見ても「十大製糸家」の一つに数えられてた矢島製糸も基本的に甲府の製糸業の枠内にあったのである。

ま、なんだろうね。大きな変化が起きた、情報の大きな変化、誰にも想像できないような変化。大きい人ほどやられた、国用の人はそう大変なことは、矢島がつぶれたのは思惑違いでえらい損をした。在庫を抱えていた。本店と支店を持っていた。相場でしょね。アメリカの立ち直りを考えていた。あと半年こらえていればもったかも知れない。上絹糸(の値段が)一円四〇銭、最低であり、もう少しもちたえれば良かった。高い繭を一年間もちこたえていたのに、製糸屋は六から九月までに一年分の原料を買い込んだ。それから一カ年が勝負です。その糸の値が下がるとどうしようもない。矢島は特約(契約)を結んだことが命取りになった。大きいことが逆にデメリットとなった。みんな思惑をやっていた。製糸家は工業でなく投機である。(中村英雄氏談)

昭和六、七年頃、蚕糸業が非常に不景気でございまして、まー私のところの同級生もみんなクビになり、やめていって、私なんか(甲府)商業の三年の時、財政が続かないということでやめさせようなんて、非常の不況の時でした。母が泣き付いてなんとかしてもらって卒業した。(中沢保男氏談)

出席者は異口同音に矢島製糸の倒産の原因を「相場」の失敗であると断じている。この「相場」こそ、「生死業」とも別称されるようにその内部では激しい浮き沈みが繰り返されたにも拘らず出席者から相次いだ、甲府の製糸業が持ったある種の活気、あるいは製糸

業者の羽振りの良さの意味を解くカギが潜んでいるように思われる。欧州大戦後は景気が良かった。輸出がどんどん売れたのですから、どんどん相場が上がってそうしたら満杯になっちゃって、戦争が終ったら下がって大正九年一月が天井です。歴史的に言いますと相場が高いから儲かった、下がったから損をしたということはない。工業として堅実にやっているところは相場が上がろうが下がろうが堅実な経営でやる。そうでないところは相場が上がるとウキウキして金を掴まえるより使う方が先に行ったということでしょう。生糸相場は繭を沢山仕入れるから糸で売っとくか相場で売っとくかすれば必ず平均値は取れる。ちょっと良いと繭も買う、それでひと儲けで相場も買うだから駄目。そういうところがばたつといっちゃう。たとえば（繭）一六貫が一〇〇〇円だったとする、繭も買う相場の方も儲かりそうだということで山勘で買っちゃう。本来ならば繭を買ったのだから（糸を）売っとかなければならない。そうしておけば相場が下がっても繭の方で損をしても相場で儲けるとか、繭を買ったり、相場も買ったりだから、それが九〇〇円になると損。博打ですね。（原忠三氏談）

相場の方はあの当時は原料を買ってその時に糸を売れば必ず工賃があった。私のところの看板がまだ残っておりますがね、「糸を売るべし、売らざる者は続かず」と、糸片に売るといふ字が続くというわけです。こじつけですがね。結局そういうことでもって、原料買ったら糸を売れ、糸を売れば儲かる。しかし、私らの業界は勝負気が強くて、こりゃ相場が高くなるだろう、そういいたいいろいろの情報をキャッチして勝負する。上がれば、たまたまうんと儲かる。見込違いで下がれば損をしてしまった。有為転変の業

界であった。戦前はアメリカにナショナル生糸、アナコンダ、これは株式ですがね、があつてね、朝六時頃になると、アメリカの情報が入る。アメリカが高いぞ、それ今日は相場が上がることになると、当時は自動車がなくして自転車ですよ、自転車で買って原料を持っている人のところで商いをした。（中村英雄氏談）

相場の決まるのはね、アメリカの景気で決まる。相場が動く、電通から入ってくる。新聞なんかじゃ遅いだから。製糸屋のお旦那衆の仕事は情報を取ること。そして仕入れをする、売るとか買うとか。おかみさんは労働力の確保から始まって、家の経済の切り盛り。だからカカア天下になるわけ。財布をがっちり握っているのだから。（原忠三氏談）

その家のご主人を見ればどっちかと言うと勝負気があれば、あまりいい糸でない。工業的にやっていたら糸もピチッとしている。糸を見ればその店の亭主が分かった。（中沢保男氏談）

（金融は）輸出の関係の方は銀行直接なんです。自分の家に倉庫もある、銀行にもある。国用の製糸屋はだいたい問屋に頼る。利子は計算するとだいたい日歩五銭でしたが、利子を三銭だ、五銭だと計算する製糸屋はいなかった。だいたい相場ばかりに目が向いていた。お袋が景気はどうですかとよその人と話をしている。アナコンダが安いから駄目だ、スチールが高いなどとばかり言っていた。スチールだアナコンダなんてなんのこんだか分からないが、問屋の利子が高いの安いなんていうことでなく相場に目が行く。諏訪は工業的に考える、甲府は相場を考える。丸茂や大矢島もそれなりに相場をやったってことでしょね。（原忠三氏談）

儲けるときの気持ちいい話、たまらんほどの話。ドイツ軍がねマジノラインを突破した時のことがまだ忘れられない。昭和一四年の九月の二日です。その日の横浜の相場が七八〇円くらい、それから毎日上がる。上がり方で言ったら、二〇円、三〇円毎日でしょう。それが暮れの大納会の時、二八日ですがね二四八円です。七八〇円がですね。それが相場のマジックですね。需要も増えた落下傘へ持っていく、(神奈川県)厚木の半原町へ持っていく。アメリカでもとても買うでしょ。軍備に使ったんでしょうね。弾薬の袋は絹であった。戦争のときは絹の需要は増える。当時、友人と三人で五〇〇円宛出して、そして、おい儲かるぞ、てわけを買って暮れに、さんさん遊んだ残りが、五万円宛分けた。暮れにそれくらい儲かった。翌八日の発会で今年も儲かるぞなんて言ったら、二〇日頃になったら一六〇〇円位になっていた。こたえられんようなことがある。相場の夢は忘れられない。ドイツ軍がマジノラインを突破した日には、何時になっても忘れられない。死ぬまで一生忘れられない。(原忠三氏談)

この原忠三氏をして今なお「相場の夢は忘れられない」と言わしめる儲けるときの気持ちいい話に甲府の製糸業界の持つ体質的な特徴が凝縮されているように思えるのである。原料繭、生糸価格とも、時には連動し、あるいは独立して様々な要因によって日々変動しており、何時、原料繭を購入するか、あるいは出荷するか、そのタイミングの如何によって利益に大きく影響が出てくるのである。製糸業では生産費の八割までを原料繭代が占め、製糸家はいかに安い原料繭を確保し、生産した生糸をいかに高値で販売するかに腐心し、そこに「相場」が成立し、「投機」が生れたのである。残念なこと

に「相場」のメカニズムは今一つ明確なものとならないが、それはともかく、多くの製糸家は工場、機械、賃金などの設備投資、生産費は最小限度に抑え、手元資金の多くを「相場」に投入したことだけは間違いないようである。それは当然、経営の不安定性に結果する。本稿で明らかになったように甲府の製糸業者は一般的に言って中小規模の器械製糸工場が多く、「信用度」が低い脆弱な製糸金融基盤のゆえに、輸出生糸を中心に全国水準で見てもトップクラスの「蚕糸王国」を築きあげた諏訪、岡谷地域のような磐石な基礎を築きえなかった。その要因の一つは「相場」と呼ばれる活動にあったと考えられる。

諏訪の人は工業的に考えてやる。工業的にものを考て、そしてやっていけば、ああ言う倒産だなんだというのはなかったでしょうね。製糸の世界は日本中同じ、相場師的、勝負師的にやったから失敗の原因でしょうね。だから遊びも派手になる。(原忠三氏談)

(相場を行なっている製糸屋は)そして今度は儲かるからって前祝をするのね。(中塚美佐子氏談)

岡谷では昭和七年に駄目になって、まだ資力があるうちに、大きな建物もあるし裏もあるから製糸屋が味噌屋になった。一つ一つが大きいから駄目になった。信州味噌の味噌屋はみな元は製糸屋ですよ。(原忠三氏談)

(諏訪地方の)金融第八十二(銀行)では戦争の始まるまえから製糸をやっているなら融資をしないぞで、長野では製糸をやめて安定した事業に切り替えろと勧めた。昭和のはじめ頃の教訓を学んだ。(中沢理吉氏談)

おわりに

ヒヤリング調査は可能な限り文献資料で明らかにした枠組のなかで、文献資料からは絶対に分らない、その時代の感触、当事者の感覚をつかむため為されるものである。本稿はかかる基準に立って、座談会「甲府市における繭糸業の歩み」の出席者の発言を、昭和戦前期の甲府市の製糸業の持つ構造およびその特質の一端を明らかにすることをテーマにして再構成を試みたものである。その結果、昭和初年に存在した製糸業内部の四層構造の析出、甲府の製糸業者の「相場」をめぐる活動など、先行研究では触れられていない興味深い幾つかの話題を引き出すことに成功した。しかし、例えば、出席者の発言から明らかとなった「出釜」の存在形態、問屋の存在とその機能、さらには「相場」のメカニズムなどまだまだ検討を深めねばならない課題も少なくない。今日に至るも依然として発見されていない甲府市域での製糸工場の個別経営資料の発見とその分析という課題は壁として我々のまえに立ちはだかっている。製糸経営資料の発見と本稿で行なった昭和初年期の分析結果を踏まえて明治から昭和戦前期に至る製糸業の発展過程をトータルに把握し、それを甲府市の近代産業経済の動向のなかに位置付けること、これが残された課題である。他日を期したい。

注

(1) 言うまでもないが現在の甲府市域にはかつて農村地帯であった地域も含まれており、該時期の農家経営にとって養蚕業の持つ意味は決して小さくないことは承知しているが、本稿で

は養蚕業と製糸業の関連についての検討は捨象した。

(2) 石井寛治『日本蚕糸業分析』（東大出版会、一九七二）、山口和雄『日本産業金融史研究・製糸金融編』（東大出版会、一九六六）、中村政則『器械製糸の発展と殖産興業政策』（『歴史学研究』、二九〇号）などを挙げておく。

(3) これまで何回か編さんされた『山梨県政史』、『甲府市政史』における養蚕・製糸業に関する記述は断片的であり、まとまったものとしては山梨県蚕糸業概史刊行会『山梨県蚕糸業概史』（一九五九）のみである。なお『山梨県蚕糸業概史』刊行以後に発表された個別資料分析によらない山梨県の蚕糸業に関連した論文の多くは基本的に『山梨県蚕糸業概史』の記述に以拠している。しかし、『山梨県蚕糸業概史』も統計数値や資料の使用については幾つかの問題点を有していると言わねばならない。

(4) 石井寛治氏は『前掲書』の中で全国的な視野から、日本の製糸経営の内部において、主として欧米絹織物業界で経糸に使用される「優等糸」を生産する「第Ⅰ類型」の製糸家と緯糸用の「普通糸」を生産する「第Ⅱ類型」の製糸家が存在していることを析出することに成功している。筆者も基本的に石井説の「類型」区分を採用したいが、甲府の実態に即した特質の把握のためにはより細かい検討が必要であろうと考えている。

(5) 石井氏も前述の製糸経営の「類型」区分の基準は海外市場での生糸の用途によるものであり、日本の製糸業において国用糸が存在することを指摘してはいるが、問題をより鋭角に

扱うためとして『前掲書』では国用糸の分析はあえて捨象されている。

(6) 大正一五年『宮本村統計綴』。

(7) 大正一四年『甲府市統計書』。

(8) 本稿を作成するにあたって使用した『山梨県統計書』、『甲府市統計書』などは製糸業の工場数、製造高、販売価格などの数値にかなりの相違がある点は製糸業の把握を行なうにあたって大きな制約となっている。本稿ではその調整を行なわなかったが、統計書相互の数値の相違の原因の究明、数値の確定は今後の課題としておきたい。

(9) 甲府商工会議所『甲府市況』二八三号（昭和八年一〇月）に「国用生糸振興座談会」記事が掲載されているが、出席者

は異口同音に「国用製糸」の重要性を強調している。

付 記

座談会にご出席頂いたのはかつて実際に製糸業に従事されたり、製糸業の周辺にあって甲府の製糸業の歩みを見聞されてこられた中村英雄、小田切彰、中沢理吉、三井金三、中沢保男、中塚美佐子、原忠三（順不動）の諸氏である。長時間に亙り近・現代専門部会専門委員の様々な質問に丁寧に答えていただいた皆様に末筆ながら深く感謝申し上げます。なお、まことに残念なことながら出席者のお一人、小田切彰氏は昨秋他界された、心からご冥福をお祈り申し上げます。

（市史編さん専門委員）